原高同窓會々報

題字は元同窓会会長門馬直孝氏

３月１日　火曜日
令和４年（2022年）

発行所
福島県立原町高等学校
同窓会
福島県南相馬市原町区西町３－380
電話　(0244) 23－6196
印刷所　有限会社ライト印刷

祝　卒業

原高の伝統を繋いだ一四三名
本日晴れて卒業

本日、福島県立原町高等学校第七十四回卒業証書授与式が挙行されます。新たに会員となる一四三名のご活躍を心からお祈りします。

歌の力で

同窓会長
杉　昭重
（二十二回卒）

第七十四回一四三名の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。人生の新たなステージに進まれる皆さんの奮闘を期待するとともに、原町高校同窓生となられました皆様を大いに歓迎します。

ここ二年はコロナ禍等もあり皆さんの高校生活も大変だったと思います。教育活動が制限される中、皆さんは創意と工夫を重ねてきました。本校吹奏楽部は、新しい生活様式に即した非接触型オンライン音楽祭に参加し、福島を元気にしたいという夢を発信しています。是非ご覧ください。

十一年前の東日本大震災と原発事故の時、私は安積黎明高校の校長でした。校舎は破壊され、体育館での授業の中、「学習環境は満足のいくものではないが、君たちには学ぶ場所と、友達、先生達がいる、何より生かされた命がある。生きていることに感謝し、今自分のできることを一生懸命やろう。」と生徒達に話しかけました。合唱部の生徒達からは、避難している皆さんを歌で元気づけたいと提案があり、早速、慰問活動が始まりました。「♪♪　ウサギ追いし、かの山・・・」生徒達が歌う「ふるさと」に涙する避難を余儀なくされている人と一緒に、わたしも歌の持つ力に体震える思いでした。原発事故で故郷を追われ、故郷に戻ることができない、辛く苦しい思いをしている皆さんが、いつかは必ず生まれ育った、あの美しい故郷に戻るんだと強く思ったと思います。言葉では伝えられないものが、歌で伝えることが出来るんだと感じました。

それ以来、わたしは、生徒達を励ます時は、場面にあった歌で、生徒達を応援するようにしました。離任式では、学校を離れるにあたって生徒達に伝いたい想いに、ぴったりの歌、「しあわせ運べるように」を歌いました。

震災後、小高中学校の卒業生がつくった「群青」は南相馬の中高生合唱団ＭＪＣアンサンブルが、美しいふるさとでまた会おうと歌い継ぎ、ふるさとにエールをおくっています。

コロナ禍の中、無観客で行われた福島でのオリンピックは野球もソフトボールも金メダルという最高の結果でしたが、五輪開催を祝い、復興を発信しようとした第九コンサートは延期されました。「第九、歓喜の歌」は自由と平和の象徴といった意味合いで世界各地で演奏されています。福島での五輪は祝祭から感謝に変わりましたが、復興の発信はまだ道半ばです。三月十三日、本校同窓生も団員のゆめはっと合唱団など、全国の合唱団が集い、第九コンサートが開催され、福島から元気が発信されます。

コロナ禍にあっても歩みを止めない教育の推進

校長　山崎　雅弘

本校同窓会の皆様におかれましては、本校の教育活動にご理解とご協力を賜り心より感謝申し上げます。本来であれば、同窓会総会や東京支部総会の場をお借りして、活動状況を報告しているところですが、新型コロナウイルス感染症の影響で二年続けて中止となっていることを大変残念に思っています。本校の状況はＨＰでお知らせしておりますのでどうぞご覧いただければ幸いです。

令和三年度の卒業式も昨年に続き来賓の方には出席をご遠慮いただく形で執り行いました。卒業生一四三名は希望も新に新生活へ向かいます。各地で同窓生の皆様にお世話になることと思いますので、ぜひお声がけをお願いします。

では、本校の現況をお伝えします。

はじめに今年度の行事関係ですが、感染症対策を十分に取った上で、野球定期戦、球技大会、修学旅行、芸術鑑賞会等を実施いたしました。生徒達はプログラムの縮小等がありながらも楽しんでくれていました。

部活動では、弓道部男子個人、陸上競技部女子やり投げでインターハイ出場、文化部では美術部、放送部が全国大会へ参加しました。また、伝統文化部（箏曲）が県最優秀賞となり来年の全国大会に駒を進めることとなりました。さらに女子のビーチバレーでの県大会優勝、新人戦でバドミントン部が創部以来初の東北大会男女団体アベック出場と多くの明るいニュースを届けてくれています。

学習環境の面では、文部科学省が「ＧＩＧＡスクール構想」を発表し、本県においても、令和四年度入学生から一人一台端末を購入し入学することとなりました。それに先だって各教室のＷｉ－Ｆｉ環境が整い、プロジェクターが備え付けられました。これからの時代に必須であるＩＣＴを活用した学習を展開するために、職員も研修を受けながら授業や課題研究等に有効に活用して参ります。

本校が毎日新聞の東日本版に紹介された特集についてご紹介いたします。令和三年八月から「ぐるっと東日本・母校をたずねる」という企画に、県内四校目として選ばれ、各方面で活躍中の同窓生の高校時代の思い出が掲載されました。それぞれが心に残る先生や友人の思い出、後の人生への影響などを語っています。ＨＰの卒業生へのところに掲載しておりますのでぜひご覧いただきたく思います。

最後に、同窓会のさらなる発展と皆様のご健勝を祈念して挨拶といたします。

原高史を編纂された若松丈太郎先生のこと

山崎健一（十六回卒）

福島県立原町高等学校に教諭として勤務された若松丈太郎先生は、昨年二〇二一年四月二十一日、八十五歳で逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

先生は岩手県江刺市（現・奥州市）出身で福島大学を卒業され、緑が丘高校（現・福島東稜高校）、勿来高校、小高農工高校（現・小高産業技術高校）、相馬高校、原町高校に勤務されました。

原町高校に十一年間勤務

原町高校には一九八三（昭和五八）年四月から九四（平成六）年三月まで十一年間勤務され、図書主任や国語の授業、クラス担任などで生徒はもちろんのこと保護者の信望も大変厚く、学園祭の投票で人気先生ナンバーワンになったこともあったそうです。学識豊かでありながらいつも謙虚で優しいお人柄で、意見や考えを押し付けることもなく、若者や子どもたちを大事にされていました。

詩人としても高名

国語科教員の傍ら詩人として全国で高名なことは周知の通りです。

事故のチェルノブイリ原発を訪問し、事故を東京電力福島第一原子力発電所に重ねた詩「神隠しされた街」を発表。三・一一で福島原発事故が起き、事故を予見した詩と世界で大きく注目されました。昨年三月には十一冊目の詩集『夷俘の叛逆（いふのはんぎゃく）』を出版され好評を博しています。

歴史的に蔑まれてきた東北地方や故郷の奥州市や南相馬市をこよなく愛し、歴史や人物の発掘に努め紹介し、また日本や世界の平和を願い、反戦、反核兵器、脱原発や憲法を守ることを詩作や評論で訴えていました。

三つの高校の校史を編纂

先生は勤務された相双地区の三つの高校でたまたま記念の周年の時機に遇い、それぞれの「学校史」の編纂に大きな足跡を残されたことを特筆したいと思います。

まず五十一年前の一九七一年小高農工高校では、編集責任者として創立六〇周年の記念誌を発行されました。私はその年に同校に転入し編集委員になりますが、全く力になれずに終わりました。

次に勤務の相馬高校では、創立八〇周年を迎える一九七八（昭和五三）年に本格的な学校史発刊が計画され、先生が編集の責任者に選ばれます。明治三一年の創立時からの校史編纂ですから、大変な仕事でした。

「人に会うのが苦手なのに、校史を聞き出すためにあちこちに忙しく出歩いていました。誤りの無いようにかなり神経を使っていたようです。」と、その頃の様子を奥様が話されています。

そんな苦労の末に、B5判四三五ページの相馬高校の学校史の『相中相高八十年』が発行されます。

それから二十年後、相馬高校は県内四番目の伝統校の誇りをかけて、創立百周年の大規模な記念誌を発刊することになりました。私も編集委員の一人でしたが新しい資料の発見は見込めず、結局若松先生の御了解を得て『相中相高八十年』をベースに編集することで進められました。

一九九八年、『相中相高百年史』はB5判一一〇五ページの大冊として完成しますが、それは調査や記録が入念だった『八十年史』があったからこそと、編集委員一同で大いに感謝したものです。

原高の校史編集に尽力

一九八三（昭和五八）年四月、先生は原町高校に転勤されますが、なんとそこでも三校目の「学校史の編纂」が待ち受けていて宿命のようなものを感じます。

原町高校は昭和六四・平成元年に創立五〇周年を迎え、初の学校史の発刊が計画され期待されていました。当初編纂委員会が教職員約二〇名で組織され、基礎資料の「原高新聞」などが収集されていました。しかし編纂委員は次々に転勤して入れ替わり、気付けば先生が編集の中心になっていました。

そもそも、学校史の発行には学校のプライドがかかっていて、大規模校や伝統校であればなおさらです。でも教職員として学校史の編纂などは全く余分な仕事で、編集専任でもなく、授業や組担任、部活動の指導やその他の校務と重複しての作業ですから、家庭に持ち帰ることも多かったはずです。

学校史の編纂自体が非常に困難な仕事で、資料を探し出し、校内外の事柄から取捨選択して執筆しますが、誇張も虚偽も推測も、またあまりプライベートなことも許されません。資料の正確な整理、公正で適切な分析なども根気の要る本当に骨の折れる仕事です。

資料の収集に苦労

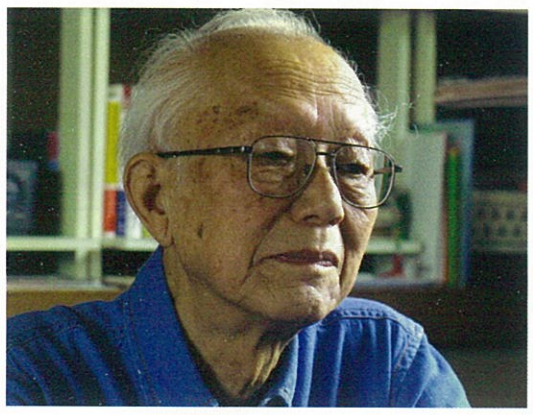
原町高校の場合は特に資料が極端に不足していました。一九三九（昭和十四）年の創立後間もなく太平洋戦争に突入し、また戦後の学制改革で県立相馬商業学校と町立原町女学校が合併して県立原町高等学校となったことの大混乱、北校舎の全焼や水害もあり、さらに小川町校舎から現在の西町校舎への移転で、大切な資料は散逸や消失していたと思われます。若松先生はじめ編集委員の先生方は、市役所や福島市の県立図書館や県教育センター、旧職員や同窓生や関係者を休日返上で訪ね歩き、苦労の連続だったと推測されます。

こうして原町高校の歴史は、『躍進・原高五十年の歩み』としてB5判・三二八ページで立派にまとめられ発刊されますが、これこそが原町高校の金字塔で、編集委員の先生方の努力と若松先生でなければ為し得なかった一大偉業です。

その後、原町高校では新たな学校史の発行は行われず、六〇・七〇・八〇周年の記念誌は『自由の鐘』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの冊子として発行されています。十年ごとの行事や写真、部活動の成績、教職員の動静、恩師の思い出や活躍する同窓生の紹介、大震災の被災のこと等を掲載しています。

「記録されなければ、記憶されない」という言葉もあります。学校の歴史にしても震災や事故や事件なども、きちんと文字や写真や映像の記録として残しておけば、のちの世代の学びや教訓にすることが出来ます。まさに温故知新の教えです。

若松先生は地元出身者でも同窓生でもありません。それでも、相双地区の県立の三つの高校の学校史編纂に心血を注がれたご功績に対し、あらためて深い敬意と感謝の意を表したいと思っています。



若松丈太郎先生

第3回柏曜賞 受賞者の横顔

「柏曜賞」は、成績優秀かつ部活動や学校行事等においても模範となる生徒へ贈られる賞であり、卒業学年より一名選出される。

今年度受賞しました五十嵐日向子さんに、生徒会活動などの思い出を質問しました。

五十嵐日向子さん（3年4組）

―受賞の感想は。

「まさか私がこのような名誉ある賞をいただけるとは思っていなかったのでとても驚いていますが、とても嬉しいです。私がこの賞をいただけたのは今までご指導してくださったたくさんの先生方や周りで支えてくれた友達、後輩のおかげです。本当にありがとうございます。」

―将来の夢を聞かせてください。

「私は生分解性プラスチックや環境に優しい複合材料に興味があり、大学では材料について学ぶつもりです。将来は大学で学んだ知識を活かし、環境負荷の小さい商品の開発に携わりたいと思っています。」

―生徒会活動の思い出は。

「この二年間はコロナ禍ということもあり、たくさんの行事が中止されたり延期されたりしました。この中でたくさんの話し合いや準備をして実施した生徒会行事でみんなから「楽しかった」という声を聞けたのが一番嬉しかったことです。一緒に活動をしてくれた生徒会の仲間には本当に感謝しています。」

―ボランティア活動ではどのようなことをしましたか。

「子ども食堂のお手伝いをしたり保育園に行ったりしました。一番長くやっていた警察のボランティア「ユーアイハート」では防犯を呼び掛ける花缶やうちわ、ポスターなども仲間と一緒に作成しました。街の中で見かけるポスターで少しでも犯罪が減ると嬉しいな、と思います。」

事務局より

●同窓会総会について

新型コロナウィルスの流行により、昨年と同様に令和三年度同窓会総会は開催中止となりました。準備されていた議案の審議については、事務局より役員の皆様に資料を郵送し、紙面表決の手続きを取りました。集計の結果すべて承認が得られたことを報告します。

また、役員改選について同窓会役員は原則、全員留任とし、改選を再度させていただきます。

なお、令和四年度同窓会総会は例年通り八月第一週土曜日の開催を予定していますが、今後のコロナ禍状況により、変更や中止の場合があります。原町高校ホームページ等にてお知らせしていきます。

●活動協力金の現状報告

今年度は四月七日に柏曜会館において、役員及び世話人が中心となり活動協力金募金に関する準備会を実施しました。準備会では趣意書の配布計画と目標金額等を確認しました。

その後の募金活動の結果十二月二十二日現在、九十九万六千円（手数料一万六千九百六十四円を含む）のご寄付をいただいております。たいへんありがとうございました。ご寄付はこれまで柏曜会館の施設修繕に使用してきました。今年度は一階のエアコンを新しくしました。

来年度も現役生徒の活動の支えになるように、活動協力金の募金活動を行う予定です。今後ともご協力をお願いいたします。

同窓会へのお問合せや紙面へのご意見・ご感想は下記までご連絡ください。
原町高等学校同窓会事務局
E-mail：harakou.dousoukai@gmail.com
TEL 0244(23)6196　FAX 0244(23)7909
学校ホームページも随時更新しています。あわせてご覧ください。
原町高校ホームページ　検索

活躍する同窓生

何事も始めから無理だと決めつけない。まずチャレンジ！～私が防災から学んだ事～

大坂　美保さん（三十四回卒）

現在、大坂さんは宅地建物取引士として活躍なされています。東日本大震災を契機に、家族と地域の人達を災害から守りたいという思いから防災士の資格を取得し、中学生の防災教育を指導しています。その指導の結果、ジャパンSDGsアワード賞の特別賞を受賞しました。地域で精力的に活動なさっている大坂さんに、防災教育・地元への思いなどの質問に答えていただきました。

●現在、宅地建物取引士としてご活躍されていますが詳しく教えてください。

①どのようなお仕事ですか。

宅地又は建物の売買、交換又は賃借の取引に対して、購入者の利益の保証及び円滑な宅地又は建物の流通に資するよう、公正かつ誠実に法に定める事務を行う不動産取引法務を行います。

多くの人にとって住宅の購入や買い替えは夢の一つ。その夢の実現の為にお手伝いする仕事です。

青森市役所では不動産の無料相談員も行っております。

②宅地建物取引士になったきっかけは何ですか。

年齢や学歴、性別、実務経験といった受験制限が無く、将来体力に関係なく働き続けられる事や子育てをしながらでも独立開業やキャリアアップも狙えると思いチャレンジしました。

③どのような勉強をすれば宅地建物取引士になるのですか。

年間二〇万人が受験する人気の国家資格ですが、合格率は一五％前後と低く、試験範囲は権利関係（民法）、宅建業法、法令上の制限、税その他の問題で構成され五〇問中七割以上の正答が必要です。

子育てをしながらでしたが、子どもが寝て家事を終えてから毎日二時間程度、九ケ月間勉強しました。民法の相続では人間関係図を作り知識を増やし、記憶するための「自分ノート」も作成して、過去問での不正解を書き直して覚えた事などの工夫が合格の要因になったと思います。

●東日本大震災当時のご家族の状況を教えてください。

青森市の我が家は、停電のみで水道・ガスも使用でき建物の被害等も有りませんでした。高校生の次男を迎えに行く車中のTVで見た津波の映像がとても強烈で自然災害の脅威を感じました。

震災直後、南相馬市に住む弟から「ライフラインには問題が無く大丈夫」と連絡が有り安心していましたが、福島第一原子力発電所での水素爆発の後「避難のため青森に向かっている、ガソリンが無くて途中までしか移動出来ない！」と連絡が入り、慌てて携行缶にガソリンを入れ車で宮城県北部古川まで迎えに行きました。青森を出発してから夜通し一七時間以上費やし自宅に戻り、弟家族と母を我が家で預かりました。

次の年に高校受験をする中三と小学校を卒業したばかりの二人の姪は青森市立東中学校に通学させましたが、二人の姪にとっては、何時原町に戻れるのか、学校は再開できるのか、友達と離れ離れになるのではないかと、毎日不安な気持ちを抱いていたと思います。

有難い事に、避難して来た事を知ったPTAの仲間たちが「何か困ってない？足りない物はないか？お米は？」と、何かと声を掛けて下さって、制服や指定の体操着なども一切準備する事も無く、地域のご縁に救われました。

●防災士を取得していますがそのきっかけと思い、さらに青森県防災士会女性部長・赤十字救急法指導員としてご活躍なされている状況について詳しく教えてください。

自宅が避難所になった事から災害や防災の正しい知識を身に着け、大切な家族や地域を守りたいと思い、二〇一二年に防災士を取得、赤十字救急法指導員は二〇一四年に取得しました。

防災士は救急救命講習（終了証）取得が必須条件です。以来、資格を必要とする方や防災士合格者への応援をしています。最近では青森中央学院大学看護科学生に救命救急法を指導しました。

●中学校防災教育の運営をなされていますが詳しく教えてください。

青森市内中学校一六校で二〇一九年から三年間、延べ三六回六二〇〇人を対象に実施してきましたが、防災教育プログラムを進めている（一社）男女共同参画地域みらいねっとの理事として参画しています。

青森市PTA連合会初の女性会長として教育委員会とのパイプを持っていた事で実現出来ました。

防災シミュレーションゲームやワークショップ・避難所運営体験など、それぞれの学校のニーズに応えられるよう、内容や時間を変えた幾つかのコースを設定して進めています。

プログラムは、災害時、中学生の力が地域を支え、命を守り抜くために欠かせない事に気づいてもらう内容です。自分の命は自分で守ること、自分が助からなければ人を助ける事が出来ない、さらに中学生は決して弱い立場ではなく、いざという時に大人と同じ力を持つことが出来ると伝えています。

●姪御さんが通学していた中学校が、ぼうさい甲子園フロンティア賞・しなやかwithコロナ賞を受賞したことについて詳しく教えてください。

①ぼうさい甲子園とは何ですか。

阪神・淡路大震災の経験と教訓を未来に向かって継承していくため、学校や地域で防災活動に取り組んでいる子どもや学生を顕彰する事業です。次世代を担う子どもたちの防災活動や災害に取り組む活動が防災教育の新たな道を切り開き、前進していきますようにとの願いが込められています。

②中学生達にどのようなご指導をなされたのですか。

平成二六年より八年間、地域と学校が一体になった避難所運営訓練を実施。地域住民の多様性に合わせ、配慮が必要な方との共助も想定した男女共同参画の視点を踏まえた防災教育が特徴です。

地域に住む防災士、消防士・消防団員、警察官、赤十字救急法指導員、民生員、おやじの会、PTA、学校運営協議会等が中学校と連携して運営委員会を組織、私は七年間運営委員長を務めました。

避難所運営訓練を通して中学生自身も地域を守り地域を支える力を養い、体験による自信が自己肯定感を育てると同時に、地域に住む中学生が防災に取り組む事で、地域防災力の向上に繋がっています。

更に一人ひとりが自分の能力を発揮し、互いに認め合う事の必要性と、助け合う事の大切さを学び、次世代へ受け継ぐ責任と覚悟を持つ事を学びます。

今年度は、コロナ禍での生徒一人一台端末を活用したリモートによる講話を実施、活発な発表と意見交換が実現しました。

「災害時、誰ひとり取り残さない避難所運営」が、常に私たちの最終の目標となっています。

ぼうさい甲子園は、二〇一八年「フロンティア賞」を受賞、二〇二〇年・二〇二一年は「しなやかwithコロナ賞」を受賞しました。

●現在、趣味など夢中になって取り組んでいることがあれば教えてください。

昨年、白神岳、八甲田山など青森県内二三カ所を登山。スキー検定も一級を目指しています。

さらに、ドローン三級検定を取得しましたのでドローンを災害時に活用したいと思っています。

●原町高校時代の思い出を教えてください。

吹奏楽部に所属してフルートを担当していました。同じパートで急逝した北野英樹先輩に薦めて頂いた頭部管が銀製の楽器を今でもとても大切にしています。朝練、昼練、部活に夏の合宿と練習漬けの高校生活でしたが、顧問の五十嵐啓一先生と副顧問の山崎健一先生に二度東北大会出場に導いて頂きとても感謝しています。

コンクール自由曲「アルメニアン・ダンスパートⅠ・Ⅱ」は、テンポが速く指使いがとても難しく感じましたが、今でも心を込めて演奏した事が懐かしく良い思い出となっています。

●地元（福島県南相馬市）への思いを教えてください。

東日本大震災で津波により最も深刻な原子力災害を受けました。震災で無人になった土地に少しずつ人が戻って来て、街づくりをゼロからスタートさせている事を伺って逞しさとともに誇りに思います。人間は困難を知識や経験で乗り越える事が出来ます。私には計り知れないとても厳しい体験をされたと思いますが、その体験を今後の地域の発展に役立てて欲しいと心から願います。

●原町高校の在校生に伝えたいことを教えてください。

防災士を始め様々な地域の活動を通して、多くの事を学び、沢山の人とのネットワークができました。懸命に向かうことで必ず得ることがあります。失敗だってそのひとつ。何事も初めから無理だと決めつけず、いろんなことにチャレンジしてみてください。ひとつを知ればひとつの行動につながり、そして、行動することで自分の命や大切な人の命を救う事も出来ます。

チャレンジと努力によって、知識や技術を身に付けた原高生の未来がより豊かに輝くことを心から願っています。

防護服製作

母校近況

●芸術鑑賞教室

図書委員長　西内　野乃

今年は二年ぶりの芸術鑑賞教室が開催されました。津軽三味線や民謡、踊りなど普段見ることのないものを見ることができてとても新鮮でした。リクエストの曲も即興で演奏されて、とてもかっこよかったです。普段見ることのないものに出会え、とても心が豊かになる有意義な時間でした。コロナ禍のなか、開催できたことにたいへん嬉しく思います。ほんとうにありがとうございました。

芸術鑑賞教室

●修学旅行

2年3組　佐藤　雄大

僕が修学旅行で印象に残っていることはふたつあります。ひとつめは、日光東照宮です。伝統的な建物や日光東照宮の歴史について学ぶことができました。

ふたつめは、那須ハイランドパークです。ジェットコースターなどいろいろなアトラクションを楽しむことができました。昼食で食べた牛タンが美味しかったです。

コロナ禍の中で大変な時期でありながらも修学旅行に行けたことを嬉しく思います。来年からは受験生になるので、志望校合格を目指し勉強に励みたいです。

修学旅行